

# みずほマーケット・トピック(2020年10月30日)

## 週末版

内容	1. 為替相場の動向	2. 来週の注目材料
	3. 本日のトピック: ECB 政策理事会を終えて～ラガルド就任、1周年～	

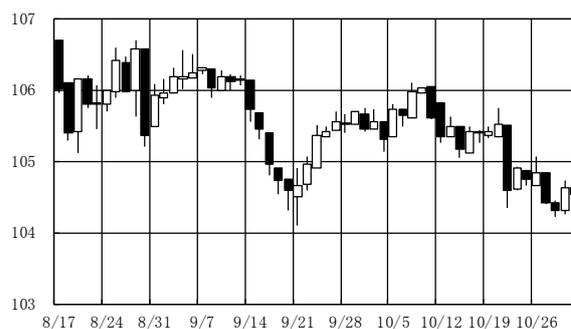
### 1. 為替相場の動向(関連レポート:「みずほ Customer Desk Report」、「今週の為替相場見通し」)

- 今週のドル/円相場は下落するも、週後半に強含む展開。週初26日、104円台後半でオープンしたドル/円は、リスクオフのドル買いが強まる中、一時週高値となる105.05円をつけるも、上値は限定的。米9月新築住宅販売件数が市場予想を下回ったことや、NYダウ平均株価の大幅な下落を背景に、ドル/円は104円台後半に押し戻された。翌27日には前日の米株価の大幅安を受けて、日本株が軟調に推移する中、リスクオフの円買いが優勢になると、米金利低下やNYダウ平均先物がマイナス圏に沈む動きに、軟調な推移が続いた。28日にかけても、欧州を中心とした新型コロナウイルス感染第2波が意識される中、リスクオフの円買いが優勢で、ドル/円は104円台前半まで下落したが、その後は買い戻しも散見され、値を戻す展開となった。29日は、ユーロ/円やポンド/円の下落に伴い、ドル/円も一時週安値となる104.03円まで連れ安となったがECB政策理事会後、ラガルド ECB 総裁が12月に追加緩和を示唆したことでユーロ売りが加速すると、ドル/円は104円台後半まで急伸した。本日は、ドル/円は104円台半ばでの値動きとなっている。
- 今週のユーロ/ドル相場は下落する展開。週初26日、1.18台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、一時週高値となる1.1859をつけた後、欧州株価の軟調推移や独9月IFO企業景況指数の悪化を背景にユーロ売りが強まると、1.18近辺まで下落した。27日は、リスクオフのドル買いが一巡すると、ユーロ/ドルは1.18台前半まで強含んだが、欧州での感染第2波への懸念が燻る中、1.17台後半まで売り進められた。28日にかけても、ユーロ売り優勢地合いが継続する中、欧州株価の軟調推移も重しとなり、ユーロ/ドルは1.17台前半まで下落。しかし、この水準では押し目買いも入り、後半にかけては1.17台後半まで買い戻された。29日には、ECB政策理事会において政策金利の据え置きが発表されたが、上述のラガルド ECB 総裁の発言を受けてユーロ売りが加速し、ユーロ/ドルは一時週安値となる1.1655まで下落した。本日にかけては、ユーロ/ドルは1.16台後半での取引となっている。

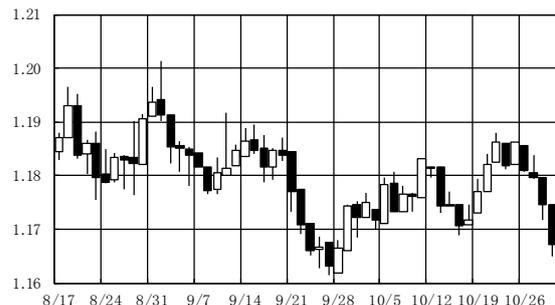
今週のおもな金融市場動向(出所:ブルームバーグ、みずほ銀行)

		前週末	今 週			
		10/23(Fri)	10/26(Mon)	10/27(Tue)	10/28(Wed)	10/29(Thu)
ドル/円	東京9:00	104.91	104.71	104.83	104.55	104.33
	High	104.93	105.05	104.89	104.56	104.73
	Low	104.55	104.65	104.39	104.12	104.03
	NY 17:00	104.74	104.83	104.42	104.31	104.62
ユーロ/ドル	東京9:00	1.1814	1.1847	1.1810	1.1783	1.1748
	High	1.1865	1.1859	1.1838	1.1799	1.1758
	Low	1.1787	1.1804	1.1792	1.1718	1.1650
	NY 17:00	1.1862	1.1810	1.1796	1.1746	1.1672
ユーロ/円	東京9:00	123.94	124.05	123.70	123.07	122.56
	High	124.22	124.19	123.98	123.16	122.89
	Low	123.42	123.79	123.16	122.20	121.90
	NY 17:00	124.19	123.81	123.16	122.58	122.12
日経平均株価	23,516.59	23,494.34	23,485.80	23,418.51	23,331.94	
TOPIX	1,625.32	1,618.98	1,617.53	1,612.55	1,610.93	
NYダウ工業株30種平均	28,335.57	27,685.38	27,463.19	26,519.95	26,659.11	
NASDAQ	11,548.28	11,358.94	11,431.35	11,004.87	11,185.59	
日本10年債	0.04%	0.03%	0.03%	0.02%	0.03%	
米国10年債	0.84%	0.80%	0.77%	0.77%	0.83%	
原油価格(WTI)	39.85	38.56	39.57	37.39	36.17	
金(NY)	1,905.20	1,905.70	1,911.90	1,879.20	1,868.00	

ドル/円相場の動向



ユーロ/ドル相場の動向



## 2. 来週の注目材料

- 米国では、3日(火)に大統領選の投票日を迎える。先週22日、トランプ米大統領とバイデン候補が第2回テレビ討論会に臨んだ。前回に続き新型コロナウイルスの感染防止策とその後経済再生案や外交政策など多岐にわたる議論を行ったが、両者にとって決め手を欠く内容となった。メディアの調査によれば、依然バイデン候補が優勢とされているものの、激戦州の結果次第ではトランプ大統領が逆転する可能性が十分に考えられる状況が続いている。共和党は今週26日に上院にてバレット氏を最高裁判事として承認し、保守派の有権者へのアピールを成功させ、最終盤での逆転を狙うのに対し、民主党は激戦州での得票率確保を通じて逃げ切りを図る構図となりそうだ。
- 5日(木)には、FOMCの開催を予定している。前回9月の会合では、金融政策は現状維持となった。FRBは資産購入ペースをこれまで通りとしたほか、物価水準がある一定の期間において前年比+2%を超えることを容認し、かかる政策目標実現まではゼロ金利を維持する姿勢を示した。しかしながら、前回会合では政策目標の達成目途や物価上昇率の測定期間に関しては明言しなかった。具体的な基準を規定するには新型コロナウイルスの脅威が去り、成長見通しがより鮮明となる必要があるものと考えられる。今回会合を前に大統領選を控える中で、大きな動きを予想する市場関係者は少なく、ブルームバーグの事前予想では政策金利は現状維持となっている。その他、経済指標関連では、2日(月)にISM製造業景気指数、5日(木)にISM非製造業景気指数、6日(金)には雇用統計が公表予定となっている。
- 欧州では本日30日(金)に7~9月期GDP(速報)及び9月失業率が発表される。4~6月期GDPは前期比▲11.8%となり、1995年の統計算出開始以降で最悪の結果となった。家計支出や民間部門の設備投資の減速が大きく影響した格好となった。ブルームバーグの事前予想では7~9月期GDPを前期比+9.6%としているが、新型コロナウイルス感染第2波の影響でユーロ圏10月総合PMI(速報)は50を下回り、サービス業PMIに関しては7月以降低下が続いている。かかる状況を踏まえ、予想より下振れる可能性も考慮したい。また、失業率について、8月は8.1%を記録し、3月以降5か月連続で悪化している。ユーロ圏の景況感は上述のように軟調となっているほか、コロナ禍での活動制限が続いている点からも労働市場の改善には依然時間を要するものと考えられる。ブルームバーグの事前予想では9月失業率を8.2%としている。

	本 邦	海 外
10月30日(金)	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月失業率/有効求人倍率</li> <li>9月鉱工業生産(速報)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米9月コアPCEデフレーター</li> <li>米10月ミシガン大学消費者マインド(確報)</li> <li>ユーロ圏7~9月期GDP(速報)</li> <li>ユーロ圏9月失業率</li> </ul>
11月2日(月)	<ul style="list-style-type: none"> <li>10月製造業PMI(確報)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米10月ISM製造業景気指数</li> <li>米10月製造業PMI(確報)</li> </ul>
3日(火)	<ul style="list-style-type: none"> <li>祝日(文化の日)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米大統領選投票日</li> <li>EU経済・財務相(ECOFIN)理事会</li> </ul>
4日(水)	<ul style="list-style-type: none"> <li>日銀金融政策決定会合議事要旨(9月分)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ユーロ圏サービス業PMI(確報)</li> </ul>
5日(木)	<ul style="list-style-type: none"> <li>10月サービス業PMI(確報)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米FOMC, パウエルFRB議長会見</li> <li>米10月ISM非製造業景気指数</li> <li>英BOE金融政策会合</li> </ul>
6日(金)	<ul style="list-style-type: none"> <li>9月家計支出</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米10月雇用統計</li> </ul>

### 【当面の主要行事日程(2020年11月~)】

- 米FOMC(11月4~5日、12月15~16日、1月26~27日)
- ECB政策理事会(12月10日、1月21日、3月11日)
- 日銀金融政策決定会合(12月17~18日、1月20~21日、3月18~19日)

### 3. ECB 政策理事会を終えて～ラガルド就任、1 周年～

#### ラガルド流の緩和予告？

昨日の ECB 政策理事会は予想通りの現状維持を決定し、12 月緩和に期待を繋ぐ情報発信に努めた。今会合の期待を次回予告で乗り切るとするのは ECB にとって伝統的なアプローチだが、今回は通常の声明文が公表される前に別書面での予告が打たれるという異例の対応が見られた。具体的には声明文前に「Monetary policy decisions」とのプレスリリースがあり、リスクが明確にダウンサイドに傾斜している現状を認めた上で「新型コロナウイルスの感染状況 (pandemic) や、ワクチン開発状況 (a rollout of vaccines) そして為替相場動向 (developments in the exchange rate) を含む今後、明らかになってくる情報を注意深く評価する」と宣言されている。こうした認識の下、12 月に改訂されるスタッフ見通しを踏まえ、政策理事会は政策を再調整 (recalibrate) すると明言している。こうした一連の記述は通常の声明文から抜粋されたものであるが、別書面として緩和予告を切り出す行為はドラギ元 ECB 総裁時代には見られなかったものだ (緩和パッケージを決定した際、別書面で決定を前出しすることはあったが、予告を別書面に出したことはない)。ラガルド流の「市場との対話」と言えるかもしれない。

#### ウイルス級に怖いユーロ高？

それにしても「新型コロナウイルスの感染状況 (pandemic) や、ワクチン開発状況 (a rollout of vaccines) そして為替相場動向 (developments in the exchange rate) を含む今後、明らかになってくる情報」という書きぶりは客観的に見ると驚きである。新型コロナウイルスやこれに対抗するワクチン開発状況といった未曾有の惨事に対する論点と為替相場動向 (すなわちユーロ高) が同列の懸念とすることだろうか。

実際、「今回の書面について少し言わせて貰いたい。ここまで為替レートへの注視を謳ったことは記憶にない」と質問ではなく意見を表明した記者も現れていることから、違和感を抱いたのは筆者だけではないのだろう。この点、ラガルド総裁は感染拡大や、その抑止策 (ワクチン) そして為替市場動向は「影響を与えることができない外的要因 (exogenous factors that you cannot influence)」だが、先行き情勢にとっての「重要な要因 (the driving factor)」という意味で並列化させたという意図を示している。確かに為替市場は政策当局が完璧に制御できる存在ではない。しかし、ウイルスやワクチンよりは金利動向などを通じて影響力を行使できる存在である。むしろ、この声明文を見て筆者は「そこまで ECB はユーロ高を恐れているのか」という印象を抱いた。恐らくそうなのだろう。

なお、過去の本欄で再三論じているので割愛するが、やはり今回の政策理事会でも域内におけるサービスの減速やこれに付随する物価低迷について問題意識が示された模様である。記者からもデフレ圧力を認めるか否かを問う質問が出ていた。これに対しラガルド総裁はエネルギー価格下落、ドイツにおける付加価値税の暫定減税、パック旅行の値引きなどを指摘し、これらの特殊要因が剥落する 2021 年にはインフレ率が浮揚してくるとの分析を披露している。ゆえに足許ではデフレ懸念はないというのが ECB の公式見解だが、現実問題として感染拡大が行動制限に至っている以上、今後、需要減退は強制的に発生する。理屈の上では物価上昇圧力は衰えるはずだ。中央銀行が「足許の物価低迷は特殊要因によるもの」と強調する時は、その信憑性を疑った方が良いと思われる。

#### 再調整 (recalibrate) の意味するもの

「政策を再調整 (recalibrate) する」と明言した以上、当然その内容を質す記者が多かった。金融市場

の多くはパンデミック緊急購入プログラム（PEPP）の拡大を見込んでいるが、ラガルド総裁は「我々が持っているあらゆる手段を排除しない。ECBや各国中銀のスタッフは既にどのような政策の組み合わせが最適なのか検討を始めている」と述べ、言質を与えていない。期待を持たせつつも言質を与えない絶妙な言い回しが続く中、「12月に追加緩和をすることで合意したという理解で良いか。それは厳密にはどういった政策が想定されるのか」と率直に質した記者も現れた。これに対しラガルド総裁は今回発表された別書面の緩和予告フレーズを読み上げることでお茶を濁しつつ、その部分こそが「**This is a key sentence**」であると強調している。12月緩和は既定路線であり「皆まで言わせるな」というのがラガルド総裁の胸中だろう。別の記者からは12月に全会一致で追加緩和するのは難しく、過去のように政策理事会に亀裂が走るのではないかと懸念も示されたが、ラガルド総裁は「行動を起こすにあたって、全会一致は必要ではない（**unanimity is not necessary to take action**）」と述べており、多数決で機動性を重視する姿勢を示している。過去の経験を踏まえれば、会合後の政治的な騒音には注意したいところだ。

いずれにせよ、緩和の中身については抽象的な情報しか言及がなかったものの、「規模・期間・条件などを再検討した上で複数の政策手段について最適な組み合わせを検討する」という発言が見られている。もちろん、PEPPが極めて便利（**instrumental**）であることは認めており、いざとなれば出資金比率（**capital key**）からの乖離を厭わずに柔軟な運営に踏み込むことを強調している。現実問題として残されたカードが豊富にあるわけでもなく、市場予想の範疇で意思決定がなされることだろう。

## 臨時会合ありき？

なお、次回会合は6週間後の12月10日だ。新型コロナウイルスの感染拡大ペースとこれに対する政府対応の現状を見る限り、今から6週間というのは相当長い。経済・金融情勢も相当な変化を強いられることが予想される。足許で急騰するVIX指数はそうした未来を恐れている結果だろう。この点、PEPPを決定した時のような臨時政策理事会がリモートで開催される可能性を問う記者も現れた。ラガルド総裁はリモート会議が一般化している世相やそのメリットを踏まえた上で「短い期間で会議を行う必要があれば、そうする」と機動的な臨時会合開催の可能性を認めている。市場参加者としては域内の株価・金利、そして為替動向が極端な動きをしてきた場合、臨時会合に構えておく必要があるだろう。

## ラガルド就任1年を振り返る

ちなみに今回はラガルド総裁就任からちょうど1周年を迎えたタイミングでの会合だった。1年前、域内外の経済・金融情勢がこのような惨事に見舞われるとは想像すらしなかったが、それだけにラガルド総裁の手腕を評価するには最適な1年にもなった。デビュー戦となった昨年12月の会合では「私はハト派でもなければタカ派でもありません。私の夢は知恵の象徴であるフクロウになることです」と述べ、柔軟な政策対応を厭わない姿勢を強調した。こうした姿勢からは多数決で突破するドラギ元総裁とは異なり、あくまで調和を重視するため、大胆な政策運営と機動性に不安があるのではないかと思われた。

しかし、その不安は今のところは杞憂だったと言えそうだ。「悲観の極み」で行われた今年3月12日の定例会合では「我々は国債利回りを抑制するためにやるわけではない。それはECBの機能や使命ではない」などと述べ、この失言が域内金利の上昇という手痛い洗礼を浴びることになった。だが、その直後となる3月18日、臨時電話会合を開催してPEPPを導入、その後もマイナス金利付き資金供給の枠組み（TLTRO3やPETROなど）を充実させるなど、緊急対応にも豪快な手腕を見せている。

その上で、危機の最中にありつつも、気候変動対応やデジタル通貨開発着手など、新分野の開拓にも余念がないことは再三報じられている。過去 1 年については十二分に合格点を与えられる政策運営だったと言えるだろう。だが、過去 1 年については、というのがポイントである。金融政策は出口まで含めて評価されるものだ。その意味で、PEPP が常態化したことで ECB の保有する国債がかなり特定国に傾斜したことは見逃せない。その出口戦略はドラギ時代で想定されたものより複雑なものになりそうである。それを心配するのはまだまだ先の話だが、中長期的な懸念を抱えたことは指摘せねばならない。

市場営業部・金融市場部  
チーフマーケット・エコノミスト  
唐鎌大輔 (TEL:03-3242-7065)  
[daisuke.karakama@mizuho-bk.co.jp](mailto:daisuke.karakama@mizuho-bk.co.jp)

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

バックナンバーをご希望の方は以下のサイトからお取り頂くことも可能です

<http://www.mizuhobank.co.jp/forex/econ.html> (Archives) [http://www.mizuhobank.co.jp/forex/econ\\_backnumber.html](http://www.mizuhobank.co.jp/forex/econ_backnumber.html)

発行年月日	過去6か月のタイトル
2020年10月29日	ECB政策理事会プレビュー～求められる緩和仕草～
2020年10月27日	中銀は環境に貢献すべきか？～ESG全盛の中で～
2020年10月26日	解せないバイデントレード～米金利とドルの逆相関～
2020年10月23日	週末版(2020年、どのような通貨が評価されているのか？～年初来の対ドル変化率を振り返って～)
2020年10月22日	続・プレジデント Q&A～首脳会議で深まった「溝」～
2020年10月20日	IMF秋季世界経済見通し改定の見るリスクシナリオ
2020年10月19日	過去最悪の米財政赤字とIMF「財政報告」
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年9月分)
2020年10月16日	週末版(この状況でも底堅いユーロ相場～IMF最新見通しでも欧米成長率格差は過去最大～)
2020年10月15日	「ミニ合意」騒動とEU首脳会議の行方
2020年10月14日	元高の背景を整理～バイデントレードに加え金利と需給～
2020年10月13日	米大統領選挙に対する市場思惑をどう整理すべきか？
2020年10月9日	週末版(ECB政策理事会議事要旨(9月8～9日開催分)～露骨なユーロ高けん制の実情～)
2020年10月8日	深刻さを帯びてきたユーロ圏の物価情勢
2020年10月6日	プレジデント Q&A～現状と展望のための6つの論点～
2020年10月5日	バイデントレードとは何か？～元買い、ペソ買い、株売り～
2020年10月2日	週末版(日銀短観(9月調査)を受けて～業況改善の裏で進む業績悪化と不安な設備投資～)
2020年10月1日	米株高と企業収益、そして恒常所得の関係
2020年9月29日	日米欧で最大になったECBバランスシート
2020年9月28日	「民間部門の貯蓄過剰」で低体温化する経済
2020年9月25日	週末版
2020年9月24日	為替市場を規定するユーロの値動き
2020年9月23日	越冬リスクという論点～安全資産「金」の薄さ～
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年8月分)
2020年9月18日	週末版(通貨高に苦しむECB～通貨政策化する金融政策～)
2020年9月17日	FOMCを終えて～日銀に似てきた情報発信
2020年9月15日	アベノミクスからスガノミクスへ～マクロ政策からミクロ政策へ～
2020年9月14日	マネー急増から何を読むべきか～「インフレの芽」なのか？～
2020年9月11日	週末版(ECB政策理事会について～実感する「ECBの日銀化」と「ユーロの円化」～)
2020年9月9日	過去の後退局面と何が異なるのか？～米雇用の深手～
2020年9月8日	ECB政策理事会プレビュー～ユーロ高けん制に動くか～
2020年9月7日	米8月雇用統計から何を読むか～「宿泊・飲食」の深手～
2020年9月4日	週末版
2020年9月3日	アベノミクス総括その②～なぜ円安になったのかを知るべき～
2020年9月2日	「真のリスクオフ通貨」になれるかの瀬戸際～試されるユーロ～
2020年9月1日	アベノミクス総括～「金融政策の無効性」という「地味な偉業」～
2020年8月28日	週末版(FRB戦略見直しとパウエル講演について～「アベレージ・ターゲット」という現状追認～)
2020年8月26日	腰折れたままの米消費者マインド～株価に連動しない誤算～
2020年8月24日	ECB政策理事会議事要旨～PEPP「全部使う」が公式見解～
2020年8月21日	週末版(FOMC議事要旨を受けて～ほぼ完全に否定された米国版YCC～)
2020年8月20日	米大統領選挙・議会選挙と為替市場の関係について
	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年7月分)
2020年8月18日	「ドル化した世界」におけるドル相場の限界
2020年8月17日	ECBの資産購入運営の現状～PSPPとPEPPの乖離～
2020年8月14日	週末版(ユーロ/ドルは購買力平価(PPP)に向かっているのか？～「1.20」台復帰を目指して～)
2020年8月12日	2020年上半期の円の基礎的需給環境について
2020年8月11日	全てを押し上げているのは実質マイナス金利なのか？
2020年8月7日	週末版
2020年8月4日	米製造業マインドよりも心配な米消費者マインド
2020年8月3日	「ユーロにあって円に無いもの」～基軸通貨性を考える～
2020年7月31日	週末版
2020年7月28日	「ドル売りの受け皿」がテーマ～過去最大の欧米逆転～
2020年7月27日	ユーロ上昇の理由～金利差縮小よりドル過剰感～
2020年7月22日	週末版
2020年7月21日	欧州銀行の貸出態度調査～ロックダウンの深手～
2020年7月20日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年6月分)
	臨時EU首脳会議で透けて見えた「第三の亀裂」
2020年7月17日	週末版(ECB政策理事会を終えて～PEPPは使い切り、「2つの機能」に向けて～)
2020年7月16日	ユーロ相場の近況について～上昇の瀬戸際～
2020年7月15日	臨時EU首脳会議～交錯する「2人の議長」～
2020年7月14日	円相場の基礎的需給環境の現状と展望
2020年7月13日	ECBプレビュー～ラガルドインタビューは現状維持を示唆～
2020年7月10日	週末版
2020年7月9日	カレンシーボードに迫る脅威～米国の「諸刃の剣」～
2020年7月8日	増枠分の天井に近づいたECBの拡大資産購入プログラム(APP)
2020年7月7日	対外直接投資はこれからも増えるのか？
2020年7月3日	週末版(明らかになる「物価差なき世界」～金利と共に失われる為替の変動要因～)
2020年7月2日	金価格が上がっている理由～リスクオフという方便～
2020年7月1日	円相場の需給環境～ストック円高、フロー円安～
2020年6月26日	週末版(IMF、GFSR改訂を受けて～「実力以上の株価」という必要悪～)
2020年6月25日	ユーロ相場はなぜ堅調なのか？
2020年6月23日	メルケル首相に託されたEU復興基金の先行き
2020年6月22日	ECB、「真のバズーカ」と「影の政策金利」
2020年6月19日	週末版
2020年6月18日	本邦個人投資家の対外資金フロー動向(2020年5月分)
	香港ドル相場の現状と展望～ベッグ崩壊の現実的な可能性は～
2020年6月17日	二番底はメインシナリオの1つとして見るべきか
2020年6月15日	29年連続「世界最大の対外純資産国」の読み解き方
2020年6月12日	週末版(EU首脳会議プレビュー～メルケル首相への花道論も～)
2020年6月11日	FOMCを終えて～当分失われそうなるドル/円のボラティリティ～
2020年6月9日	米国はいずれ通貨政策に訴えかけるのか？～特権の行使～
2020年6月8日	金利上昇を容認したFRBと視野に入るYCC
2020年6月5日	週末版(ECB政策理事会を終えて～2022年末までバランスシート残高は高止まり～)
2020年6月4日	明らかにされたパンデミック緊急購入プログラムの全貌
2020年6月3日	米個人消費・所得、急変動に透けて見える日本化の胎動
2020年5月29日	週末版(ECB政策理事会プレビュー～PEPPに孕む隠蔽リスク～)
2020年5月27日	最近の元安・ドル高相場の読み方
2020年5月26日	IMF「国際金融安定報告」続報から読み取れるもの